大谷大学真宗総合研究所

研究所報

No.35　1997. 12. 15.

目次

現代における真宗の再興　1
1997年度「指定研究」研究組織一覧　2
1997年度「一般研究」選考結果発表　3
1997年度「一般研究」研究目的紹介　4
1995年度「指定研究」研究経過報告　9
1995年度「一般研究」研究結果概要　15
アメリカにおける日本仏教研究の状況　21
彙報　25

現代における真宗の再興―蓮如研究プロジェクトについて―

蓮如研究チーフ・教授　鍵主良敬

いよいよ蓮如上人五百回忌の御遠忌を迎えることになった。大谷大学では、この御遠忌の記念事業として、真宗総合研究所における特定研究が企画された。現在９名の研究員と４名の研究補助員によって、研究が鋭意推進されている。

この「蓮如研究」は、(1)「蓮如」にかんする論文集の刊行、(2)『御一代記聞書』に対する現代的視点からの解説書の作成、(3)定本『七祖聖教』の編集の３事業から成るプロジェクトであるが、この３つのプロジェクトの目的と方針、現在の作業状況について簡単に紹介・報告しておきたい。

(1)論文集については、親鸞の「浄土真宗」の教学を蓮如がどのように個性化したのか。親鸞に直結する部分を念頭に置きながら、展開された意図を掘り起こす。蓮如の教学の表明は、『御文』が中心であるが、そこに示される真宗理解は、『歎異抄』や『安心決定鈔』乃至は覚如、存覚に真宗理解に多くの教示を得ている。そのような蓮如の思想を、現代的課題を視野に入れながら、教学のみならず歴史学・社会学等の幅広い視点から解明する。したがって、論文の執筆者は、真宗学・仏教学だけではなく、他学科および学外までその範意を広げて依頼した。現在、専門性を視野に入れた調整をして、特に大谷大学独自の論集という性格を浮き彫りにすることを目標に編集作業にあたっている。

(2)『御一代記聞書』解説書については、蓮如上人の人間像がうかびあがってくるように心がけ、その教化と真宗を生きる姿を解明する。室町期当時の大衆の課題に応答した教化者としての生き様が、現代に即応した表現をとればどうなるか等の視点から解説する。この作業を通じて、『御一代記聞書』を見直し、宗門の教化事業の一助となるように努める。現在、『御一代記聞書』の条文をその内容にしたがって区分し、テーマ別に抄出して、上記研究目的にそった形での内容を検討しつつ、作業を進めている。

(3)定本『七祖聖教』の編集については、大谷派では定本的依用本とすべき『七祖聖教』がないので、この御遠忌を機縁として定本となる聖教を編集する。底本は南条神興本（宗祖加点本の現存するものは、加点本による）とし、必要な校訂を施して、依用に便ならしめる。この事業は蓮如五百回忌を記念として編集するが、さらに宗祖の七百五十回忌をも展望しながら、当派の教学・学習の基本的聖教としたい。漢文テキスト（真宗聖教全書に相当するテキスト）・延べ書きテキストの２つのタイプのテキストを作成する予定であるが、現在漢文テキスト底本の原稿を作成中である。

いま紹介した本研究プロジェクトの研究課題は、「現代における真宗の再興」である。蓮如上人の果たした歴史的な役割は、上人が「真宗再興の上人」と呼ばれるように、「真宗再興」ということである。この五百回忌は、現代の時代状況の中で、私たち一人ひとりが蓮如上人の果たされた仕事を再確認し、上人が見据えていたことを明らかにして、それを実践的に表現する大切な機会である。この研究プロジェクトによって、上人における学習・聞法・教化伝道にかかわる基礎となる視点と、資料が提供できれば幸いである。

蓮如上人五百回忌を迎えるにあたって、現在まで看過されてきた観のある蓮如上人の思想・人間像を改めて、再評価・再確認する機会に出遇えたことを感謝するとともに、責任の重さを痛感する次第である。

1997(平成９)年度「指定研究」研究組織一覧

研究名	研究課題および研究組織
特定研究 大学史編纂研究 代表者 学長・訓覇　曄雄	研究課題　「近代における大谷大学の成立と展開の研究」 研究員　武田　武麿（チーフ・教授） 門脇　　健（助教授） 佐賀枝夏文（助教授） 宮崎　健司（助教授） 友田　孝興（所長・教授） 安藤　文雄（主事・助教授） 嘱託研究員　福島　栄寿（光華女子大学真宗文化研究所職員） 研究補助員　御手洗隆明（博士後期課程満期退学） 平原　晃宗（博士後期課程３回生） 狭間　芳樹（博士後期課程１回生）
特定研究 国際仏教研究 代表者 学長・訓覇　曄雄	研究課題　「諸外国における仏教研究の動向と展開の研究」 研究員　安冨　信哉（チーフ・教授） 宮下　晴輝（助教授） 加来　雄之（助教授） 渡辺　啓真（助教授） 樋口　章信（専任講師） Robert F. Rhodes（専任講師） 友田　孝興（所長・教授） 安藤　文雄（主事・助教授） 嘱託研究員　羽田　信生（沼田仏教翻訳研究センター研究員） Mark Blum（フロリダアトランティック大学教授） Alfred Bloom（ハワイ大学名誉教授） Jan Van Bragt（南山大学名誉教授） 研究補助員　山本　和彦（本学非常勤講師） 田村　晃徳（博士後期課程２回生） 箕浦　暁雄（博士後期課程１回生）
特定研究 蓮如研究 代表者 学長・訓覇　曄雄	研究課題　「現代における真宗の再興」 研究員　鍵主　良敬（チーフ・教授） 臼井　元成（教授） 神戸　和麿（教授） 大内　文雄（教授） 一色　順心（助教授） 草野　顕之（助教授） 須藤　訓任（助教授） 一楽　　真（専任講師） 友田　孝興（所長・教授） 安藤　文雄（主事・助教授） 嘱託研究員　寺川　俊昭（大学院特任教授） 研究補助員　一條　顕良（博士後期課程３回生） 武田未来雄（博士後期課程３回生） 山田　恵文（博士後期課程２回生） 竹原　了珠（博士後期課程１回生）
委託研究 真宗史料研究 代表者 学長・訓覇　曄雄	研究課題　「『園林文庫』目録データベース作成のための調査研究」 研究員　大桑　　斉（チーフ・教授） 名畑　　崇（教授） 木場　明志（助教授） 研究補助員　武田　朋宏（博士後期課程３回生） 村上　紀夫（博士後期課程２回生）
委託研究 西蔵文献研究 代表者 学長・訓覇　曄雄	研究課題　「大谷大学所蔵の北京版大蔵経および蔵外文献の研究」 研究員　片野　道雄（チーフ・教授） 小川　一乗（教授） 小谷信千代（助教授） 白館　戒雲（助教授） 兵藤　一夫（助教授） 嘱託研究員　今枝　由郎（フランス国立科学研究センター主任研究員） 福田　洋一（東洋文庫研究員） 研究補助員　加藤　秀樹（博士後期課程満期退学） 三宅伸一郎（博士後期課程２回生） 櫻井　智浩（博士後期課程１回生）
委託研究 大蔵経学術用語研究 代表者 学長・訓覇　曄雄	研究課題　「『大正新脩大蔵経』経集部関係典籍における学術用語の研究」 研究員　福島　光哉（チーフ・教授） 古田　和弘（教授） 木村　宣彰（教授） 織田　顕祐（専任講師） 研究補助員　長沢　　円（博士後期課程満期退学） 釆睪　　晃（博士後期課程２回生）

1997(平成９)年12月15日

1997(平成９)年度「一般研究」選考結果発表

(A) 共同研究

研究代表者	研究課題および研究組織	補助金
小野　蓮明	研究課題　「清沢満之の研究 —清沢満之全集編纂のための基礎資料の調査研究—」 研究員　小野　蓮明（教授） 樋口　章信（専任講師） 一楽　　真（専任講師） 嘱託研究員　木越　　康（助手） 研究補助員　名畑直日児（博士後期課程２回生）	170万円
吉元　信行	研究課題　「大谷大学図書館所蔵パーリ語貝葉写本の文献的研究」 研究員　吉元　信行（教授） 長崎　法潤（教授） 嘱託研究員　池田　正隆（本学非常勤講師） 研究補助員　舟橋　智哉（博士後期課程２回生）	140万円
滋賀　高義	研究課題　「三朝高僧伝の比較研究」 研究員　滋賀　高義（教授） 竺沙　雅章（教授） 若槻　俊秀（教授） 河内　昭円（教授） 大内　文雄（教授） 佐藤　義寛（助教授） 織田　顕祐（専任講師） 浦山あゆみ（専任講師） 嘱託研究員　今場　正美（本学非常勤講師） 西尾　賢隆（花園大学教授・本学非常勤講師）	140万円
加来　雄之	研究課題　「初期無量寿経の典籍・思想研究」 研究員　加来　雄之（助教授） 古田　和弘（教授） 宮下　晴輝（助教授）	170万円
Norman A. Waddell	研究課題　「Reginald Horace Blythの研究」 レジナルド・ホレス・ブライス 研究員　Norman A. Waddell（教授） 多田　　稔（教授）	170万円

(B) 個人研究

研究代表者	研究課題および研究組織	補助金
加藤　尚子	研究課題　「シロイヌナズナの突然変異体の分離」 研究員　加藤　尚子（教授）	50万円
沙加戸　弘	研究課題　「『親鸞聖人御絵伝』絵解き　基礎資料の研究」 研究員　沙加戸　弘（助教授）	80万円
藤田　昭彦	研究課題　「〈メディア教育〉の基礎的研究」 研究員　藤田　昭彦（教授）	80万円

1997(平成９)年度「一般研究」研究目的紹介

共同研究

清沢満之の研究
―清沢満之全集編纂のための基礎資料の調査研究―

研究代表者　小野　蓮明
(真宗学)

本学の学祖である清沢満之の果たした仕事について、これまでにも真宗学科をあげて研究が進められてきた。その中で、清沢満之研究のための基礎資料の検討をおこなってきたところ、既刊の全集（３巻本、６巻本、８巻本）を校訂していくだけでは不十分であることが判明してきた。すなわち、

①現在わかっているだけでも、これまでに未収録の論文・講演記録などが20数点発見されていること。

②過去に雑誌などで公にされていない資料である清沢の随想・日記・書簡などについては、既刊の全集と清沢の自筆原本との対校が不可欠であること。

③清沢と交流をもった人々（たとえば月見覚了氏など）のもとに、未公表・未整理の清沢関係の資料があり、それらの調査も必要であること。

などである。

これまでの清沢研究の基本資料であった『清沢満之全集』全８巻（法蔵館刊）が絶版となっている今日、研究に耐えうる全集の刊行には、内外からの強い要請がある。しかしながら、既刊の全集の整理というだけではその要請に根本から応えることにはならないと言える。この見地に立って、本研究は清沢満之全集の充実を期して、自筆原本の確認および未公表・未整理資料の調査と整理をおこなうことを目的とすると共に、全集刊行のための作業も継続していこうとするものである。

本年度は、特に未公表資料の調査のためのフィールドワークを中心にして、その資料の収集および整理に努める。中でも、清沢の自坊である西方寺（愛知県碧南市大浜）の調査は不可欠の課題であると考えている。自筆原本の所在確認も含め、早急に進めていく予定である。

また、併せて全集編纂のための基本構想についても、これまでの研究成果に基づいて練り上げていく予定である。

共同研究

大谷大学図書館所蔵
パーリ語貝葉写本の文献的研究

研究代表者　吉元　信行
(仏教学)

大谷大学図書館には、南方上座部仏教の貝葉写本が多数蔵されており、我々研究員が中心となって長年目録出版の作業に携わってきたが、その成果としての『大谷大学図書館所蔵・貝葉写本目録』（大谷大学図書館編、平成７年３月刊）が出版されてから２年が過ぎた。この目録は内外の専門家や研究機関に寄贈されたが、さっそく多数の反響が寄せられており、この貝葉写本を研究しようとする学外の研究者が殺到することが予想されている。そこで、我々は、本学におけるパーリ学を専門とするスタッフとして、昨年度「一般研究」により、いち早くその文献的研究に着手した結果、クメール・ビルマ・モン文字貝葉写本について、ほぼその大要を整理し得た。本年度もその継続研究が認められたので、昨年度の成果に基づいて、以下の研究作業を継続するものである。

１.本学パーリ語貝葉写本の出自及び将来経路の解明。

２.貝葉目録における套毎の巻頭・巻末文のローマナイズ作業を貝葉写本原本と照合しつつ継続。

３.全貝葉写本について、(1)PTSにもほぼ完璧な校訂本があって、本写本と対校の必要の少ないもの、(2)PTSの校訂が不完全で、本写本との対校によってその成果の期待されるもの、(3)PTS等にまだ校訂出版されていない新資料(稀覯写本)、(4)現地語など、パーリ語以外の言語で書かれていて、本学の現有スタッフでは研究の困難なもの、などの分類整理がほぼなされた。

本年度は上記２の成果を活用しながら、この作業を継続する。そして、この成果を一覧表にして、研究紀要に発表する予定である。この一覧表は『大谷大学図書館所蔵・貝葉写本目録』のサマリー的役割を果たすこととなり、目録は高価で、専門の研究者すべてが所持しているわけではないので、研究紀要またはその抜刷を専門の研究者に広く配布して、本学貝葉写本活用のための手引きになるようにしたい。このことによって、本学スタッフ

では研究の不可能な資料についても、学外の研究者による研究の道が開けてくるかもしれない。

4.上記3.(1)(2)の写本群について、PTS版等の刊本からの逆引き索引を作成し、研究紀要に発表する予定である。この索引によって、刊本と本学写本との校合が容易にできるようになる。

5.上記3.(3)の稀覯資料の中で特に重要な資料の校訂・解読研究をする（貝葉写本中、タイ所伝の"Paññāsajātaka"の研究を実施する予定)。

本研究は研究代表者及び次のメンバーの共同研究によってなされる。研究員:長崎法潤（本学教授)、嘱託研究員:池田正隆（本学非常勤講師)、研究補助員:舟橋智哉(本学大学院博士課程)、ほか本学大学院生数人の協力を得る。

この共同研究により、本学図書館所蔵パーリ語貝葉写本が、パーリ仏教学及び東南アジア仏教文化研究に果たす役割が明らかになり、散逸しかけている貝葉写本を解明するという点もあわせて、学界を益することになるであろう。

共同研究

三朝高僧伝の比較研究

研究代表者　滋賀　高義
(東洋仏教史)

平成八年度は禅宗五祖弘忍の後を承けた神秀と慧能、すなわち所謂北宗と南宗の関係に照準を合わせて、関連する釈教碑十一首の解読を終えた。今年度は荊渓湛然・華厳澄観・圭蜂宗密・慧能を承けた荷沢神会・南嶽懐譲・馬祖道一等々教団形成期に活躍した高僧に関わる碑文について読解作業を続行している。

本研究の目的の一つは、宋代の歴史家賛寧が原資料にいかに対応したかを検証する点にある。しかし読解する資料には賛寧が一顧だにしなかったものも含まれる。賛寧がなにゆえに採用しなかったかという疑問はまた興味ある問題を提起するからである。

中唐の文人劉禹錫の「袁州萍郷県楊岐山故広禅師碑」は原碑がなお存する荷沢神会の法嗣乗広の碑文である。文中に乗広の法嗣甄叔が一門の徒を率いて乗広のために建塔した事実を記録するが、賛寧は乗広はもとよりこれらの史実を全く採らない。一方、『宋高僧伝』は巻十に「袁州楊岐山甄叔伝」を立てて甄叔を顕彰するが、ここでの甄叔は馬祖道一の法嗣として伝えられている。これは賛寧が甄叔のための別の碑文を参考として立伝したからであるが、乗広の法嗣であった事実を無視したのはなにゆえであったか。賛寧が劉禹錫の乗広碑を手にしなかったとは考え難い状況であっただけに、そこには『宋高僧伝』撰者の史観がはたらいていたと推測するのが妥当であると思われる。

今年度は本研究を一応締め括り、その成果を公開する時期にあたる。一つには昨年度および今年度に研究会を通して解読した碑文を整理する必要がある。一つには原資料から得られる各宗派のその時点での法灯説を整理しておく必要がある。また一つには例として上記した乗広碑と甄叔伝との関係のごとく、賛寧の立場に考察を加えておく必要がある。さらには北宗・南宗・牛頭宗・天台宗・華厳宗・律宗・浄土教と複雑に錯綜する時代の趨勢を社会史上の状況とも関連させて勘案しておく必要がある。

以上の必要事項を充足させる目的をもって、共同研究者一同が各自の分担にそって資料整理並びに論文を期間内の比較的早い時期に執筆し、公開する予定である。成果は学会に少なからず稗益するところあるものと信ずる。

共同研究

初期無量寿経の典籍・思想研究

研究代表者　加来　雄之
(真宗学)

現存する七種の〈無量寿経〉の異本を、初期〈無量寿経〉と後期〈無量寿経〉に分けることは、現在学会で認められている。

初期〈無量寿経〉に属する漢訳の『無量清浄平等覚経』と『大阿弥陀経（諸仏阿弥陀三耶三仏薩樓仏檀過度人道

経)』の二経は、浄土経典のみならず、漢訳大乗仏典としても、もっとも古い時期に属するものである。この二経の研究をとおして、浄土教の古層、さらには大乗仏教の源流というべきものが明らかにされることが指摘されている。

またこの二経は、中国・朝鮮・日本において浄土教の思想が形成されるうえにおいて少なからぬ影響を与えている。たとえば、もっとも流布し影響力をもった魏訳〈無量寿経〉を読解するうえにおいて大きな指標となってきたのである。とくに日本浄土教における法然の「選択」という概念、親鸞の「諸仏称名」という思想が形成されるうえにおいて大きな役割を果たした。

しかし、これまで〈初期無量寿経〉についての詳細な解読による基礎テキストがない。またこの二経が浄土教形成においてどのような役割を果たしたかについて、文献学的な研究はあるが、それぞれの経典における教理の思想的な問題、とくに浄土教の形成からみたそれらの教理がもつ思想史的な影響については、十分に解明されたとはいいがたい。

この研究は二つの側面からなされる。一は典籍研究であり、もう一は思想研究である。典籍研究の成果として、総合的な研究に基づいた解読テキスト（諸本校訂、書き下し、現代語訳、訳註を含んだもの）を作成し、データベース化したい。また思想研究としては、初期〈無量寿経〉が、中国・朝鮮・日本の浄土教においてどのように受容され、また影響を与えてきたかについての研究成果を出したい。

共同研究

Reginald Horace Blyth の研究

レジナルド　ホレス　ブライス

研究代表者　Norman A. Waddell
（英文学）

ブライス（1898－1964）博士は戦前、戦中、戦後と一貫して日本に滞在し、日本文化研究を行ない、その結果を主として俳句及び禅文化に結実させ、英文著書でもって世界に紹介した知日イギリス人中の最大の日本研究者であり功労者であった。博士は戦前に京城帝大予科の英語の教師として東洋文化に触れ、その後金沢の第四高等学校に移ったが、太平洋戦争勃発により収容され軟禁生活を送った。京城で初めて触れて体験した禅と俳句研究が結実したのはこの期間であった。戦後それらの著作を世界に広く発進し、禅及び学習院を契機として知遇を得た鈴木大拙と共に、禅に関する英文の著作者として大活躍した。博士はさらに終戦後の連合軍総司令部と日本政府の間に立って数々の仕事をし、今日の日本の繁栄の基礎を造った人物でもあった。膨大な量に達する著作及び翻訳書ならびに広い人脈を通じて行った数々の行動の結果は、博士が意識的に歴史の黒子に徹しようとしたために未だに殆ど埋れたままになっている。例えば明仁皇太子（現天皇）の家庭教師を十数年に亘って続けたのは実はブライス博士であり、博士の要請でその間に2年ばかりアメリカ婦人が加わったのであるが、世の中では皇太子家庭教師といえばそのヴァイニング夫人の名前だけが知らされているといった具合である。その一生を辿りその業績を整理し、世間の過少評価あるいは埋没された姿をあるべき位置にもどすことは極めて重要である。この研究が始まった時点でブライス研究に関する顕著な著作あるいは研究論文としてはそれぞれ一点しかなかった。昨年、その生涯に関する著作一点が新たに出版されたが、それでも計三点しかないのが現実である。すでに共同研究者多田はその著『仏教東漸—太平洋を渡った仏教』（1990）でその一章を割き、博士の業績の一部を紹介しているが、ワデルは、実はこのブライスを慕って来日し大谷大学に職を奉じ*Eastern Buddhist*誌で晩年の大拙と共に活躍したアメリカ人の仏教研究者である。ブライス博士はその後事をすべてワデルに託したのである。そうした貴重な資料を今回整理し、松ヶ岡文庫に寄贈された著作等出版物も参照させていただき、博士が生前親しくされていた方のうち、存命されている方とインタビューを行ない、それらすべてを基にした日本語と英語による成果を発表し、ブライス博士の業績と全体像を明らかにし、その過少評価を修正し、あるべき位置にもどすことをこの研究は目的としている。

個人研究

シロイヌナズナの突然変異体の分離

研究代表者　加藤　尚子
(分子生物学)

シロイヌナズナは双子葉植物で、イネは単子葉植物でそれぞれ多くの遺伝学的、生理学的な研究が進んでおり、現代の植物研究において、モデル植物としての役割を果たしている。シロイヌナズナは世代時間が1～2月と短く、実験室内で容易に栽培することができるなど、モデル植物としての条件を備えている。またすでに多くの突然変異体が分離されていて、研究者に無料配布される機構も世界的に整備されている。本研究はそれらを有効に利用しながら、次のようなことを目的として行うものである。

シロイヌナズナの種にX線照射して、突然変異を誘起したものを用いて形の変異した植物を分離する。生殖器官である花の変異は種を作らないことが多いので遺伝的にヘテロになっているものを探さなければならないが、形態の変化した植物の種の収集を計ることを目的とする。

シロイヌナズナはロゼット様の葉から1本の茎が伸びてその先に花を付ける。その後2～3本の茎が伸びてくる。ところが初めからたくさんの茎が伸びて非常にブッシイな状態になる変異がある。これは主軸の頂点から分泌される植物ホルモンが次に出てくる茎の成長を押さえている（すなわち主軸が優性であることを頂芽優性という）のであるが、これの変異が起きると側枝の伸長を押さえられなくなり、次々に茎が伸長してくるものである。この頂芽優性が変異したものを重点的に分離し、その他に形態の変化したものも分離しようと思っている。植物の形態は植物ホルモンに支配されることが多く、頂芽優性もその一つである。実際多くのブッシイな変異体は花の器官に変異を持っていたり、葉の形や、植物体が小さくなるなど多くの他の変異も併せ持っている。このことが植物の形態形成の解明を難しくしているのであるが、多くの変異体を比較することが解明の道につながるのではないかと思ってなるべく多くの突然変異体の分離を試みるつもりである。そしてこれらの突然変異体の変異箇所を調べることにより植物ホルモンの働きと遺伝子の働きの関係を明らかにして植物の形態形成がどのようにおこるのかを明らかにしたいと思っている。

個人研究

『親鸞聖人御絵伝』絵解き基礎資料の研究

研究代表者　沙加戸　弘
(国文学)

『親鸞聖人御絵伝』の「絵解き」は、極めて高度かつ豊富な内容を持ちながら、現在までその研究がほとんどなされて来なかった。否、「絵解き」の研究そのものが、緒についたばかり、というのが現状である。

『親鸞聖人御絵伝』は覚如選述の当初は周知のとおり絵巻であったが、この絵巻という形式は多人数が一度に披見するに著しい不便を生ずる。恐らくは、集会に参ずる門徒の要請によって、絵巻は掛幅の絵伝と、巻子もしくは冊子の伝文とに別行されるようになった。絵と文とが別行されたことは、絵の理解が不十分となる結果を招いた。ここに、『親鸞聖人御絵伝』における「ヱトキ」が発生したのである。

中世から近世初期までは、本願寺から下附される『親鸞聖人御絵伝』の数も少なく、「ヱトキ」の需要も必然的に多くはなかったと考えられる。

しかし近世初期（明暦）の二度にわたる江戸の大火によって齎された、三十年間の高度経済成長の波が、四都の周辺に及んだ元禄期以降、とりわけ享保、元文以降は、多くの『親鸞聖人御絵伝』が、地方道場に下附された。何が描かれているのか、という知的好奇心が、『親鸞聖人御絵伝』の「絵説き」の時代を招来したのである。

さらに、どこの道場にも、同一絵相の絵伝がある、という優れた条件が、「絵解き」という営為の継承的発展を可能にした。

そして明和・安永期・『親鸞聖人御絵伝』のヱトキは、「絵解き」という段階に至る。一々の絵相に新たな意味を付与し、教義として読みとる、「絵解き」の

名称にふさわしい営為が成立したのである。

この、「絵解き」の名称にふさわしい営為と、単なる絵相の説明である「絵説き」の区別は、全くつけられていない、というのが絵解き研究の現状である。

本研究は、右の『親鸞聖人御絵伝』絵解き展開の大筋に従って、一々の資料を検討し、『親鸞聖人御絵伝』絵解き資料の現存所在目録を整備することを目標とする。

この研究において、資料目録を整備し、もって本格的な総合研究への条件を整えたい、と思量するものである。

個人研究

「メディア教育」の基礎的研究

研究代表者　藤田　昭彦
（心理学）

教育の効率化を高める手法として視聴覚教育があるが、技術革新の急速な進展に伴い、新しいメディアが産み出され視聴覚機器の環境が急変している。新メディアはコンピュータ、とりわけパーソナル・コンピュータが常に関わっているという特徴がある。視聴覚教育の展開には、コンピュータ・リテラシーこそがなによりも求められるところである。しかし現実は、新メディアへの習熟も十分になされないで教育現場に導入され、活用されないままにかえって教育に混乱を生じる場合もあるようである。

今後とも教育に潜在的に活用されうるメディアは改造・産出され続けるであろう。そこでは新たな「視聴覚教育」の理論構築と有用な手法開発が求められるのである。あるいはたんに学校教育における視聴覚教育としてではなく、一般的な送り手と受け手の間をつなぐメディアについて、その状況を整理・把握し、教育目標などを達成するのに適合するメディアの選択を可能にする理論的基礎が必要と考えられるのである。

「メディア教育」は、教育のメディアの吟味と併せて、メディア・リテラシーともいうべき能力の育成を目指すものであるべきであろうが、技術的な可能性が優先されて開発製造されてきた新メディアのゆえに、それらの基礎的研究が不十分であると考えられる。

人の認識・理解についての心理学的知見を整理しながら、Sensory Modality（感覚様式）に適した情報やそれぞれのメディアの人間の学習にとっての特性を明らかにし、メディア活用の基礎を明確にすることが、「視聴覚教育」にとってかわる「メディア教育」創造の第一の段階である。本研究はこの第一段階であるメディアの教育における実用的特性を明らかにすることを目的とする。具体的には、以下のような問題について順次考察を進める予定である。

1）メディアの現状について把握する。とくに送り手、受け手双方のメディアとのインターフェイスに注目しながら、実際場面でのそれぞれのメディアの具体的な活用の可能性を明らかにする。

2）メディアとしてのパーソナル・コンピュータの利用教育のプログラムの開発。すなわち、メディア・リテラシーとしてのコンピュータ・リテラシーを高める教育内容とその展開について検討する。

3）人間が行う事象事物に対する認識・理解の実体について、心理学、認知科学の基礎的研究の成果を収集整理して、それらをふまえた「メディア教育」の理論構築を試みる。

1995(平成７)年度「指定研究」研究経過報告

特定研究

大学史編纂研究
—近代における大谷大学の成立と展開の研究—

研究員・チーフ　武田　武麿
(宗教学)

大谷大学に於ける大学史は、過去を振り返り、回顧するだけのものではなく、本学の現在の問題を掘り下げ、過去を探り、将来を展望する課題意識を以て編纂されるべきである。それによって、建学の理念を確かめ、さらには本学の新たな改革の指針をも示すことになるであろう。本研究の意義を以上の如く再確認して、1995年度の研究を進めた。

研究課題である「近代における大谷大学の成立と展開の研究」の中で、新たに「大正期大谷大学史研究」に入った。また、それと並行して、大谷大学百年通史の基礎作業を進め、パンフレット『大谷大学の100年』の作成を行った。これは大谷大学近代100年の概略史である。

完成したパンフレットは、B５サイズ10頁。構成は、

Ⅰ　東京開学までのあゆみ
　１学寮創立
　２闡彰院空覚
　３紆余曲折
Ⅱ　開学　—浄土真宗の学場—
　１開校の辞
　２反発
　３学の新風
Ⅲ　「大谷大学」の名のり
　１閉校と移転
　２新たなる転回
　３大谷大学樹立の精神
Ⅳ　激動の時代の中で
　１事件
　２戦時体制
　３大谷教学研究所
Ⅴ　「戦後」新制大学
　１新制大学の装い
　２大衆化の流れの中で
　３学の問い直し
Ⅵ　真宗の公開　—大谷大学の使命—
　１総合の試み
　２糾弾
　３学の開放

概略史ではあるが、大谷大学の歴史を真宗公開という視点から簡潔にまとめたものである。

会議及び研究会を下記のように行った。

1995年

第１回５月10日(水) 12時50分　於博綜館小会議室１
　研究計画打ち合わせ
第２回５月17日(水) 午後６時　於大学史編纂研究室
　パンフレット作成にむけて、大谷大学創立から1944年までの項目整理
第３回 ５月25日(木) 午後６時　於大学史編纂研究室
　1945年以降の項目整理
第４回６月１日(木) 午後１時　於大学史編纂研究室
　寛文５年からの見直しと整理
第５回６月14日(水) 午後６時　於大学史編纂研究室
　30項目、50項目、150項目の年表作成と時代区分
第６回６月22日(木) 午後６時　於大学史編纂研究室
　大谷大学100年の小見出しの検討
第７回７月５日(水) 午後６時30分 於大学史編纂研究室
　パンフレットの文章検討　戦前の大谷大学まで
第８回７月10日(月) 午後７時　於大学史編纂研究室
　パンフレットの文章検討　現代まで
第９回７月18日(火) 午後６時 於大学史編纂研究室
　パンフレットの文章検討・原稿完成
第10回７月25日(火) 午後12時　於大谷大学第３会議室
　全体会　パンフレット完成報告
第11回10月25日(水) 午後７時50分 於大学史編纂研究室
　大正期研究作業検討
第12回10月27日(金) 午後12時 於第３会議室
　全体会　大正期大学史執筆分担の検討
　各研究員の研究計画について協議
第13回11月22日(水) 午後４時10分　於大学史編纂研究室
　全体会　大正期大学史執筆分担
　各研究員が担当した事項について研究を進め、年度末までに原稿を執筆することとする。

1996年

第14回３月21日(木) 午後６時　於大学史編纂研究室
　95年度の作業経過の確認、次年度の研究推進について

以上の1995年度の研究を基礎として、1996年度は、

大谷大学史の図録写真集の原稿を完成し、さらに「大正期大谷大学史研究」をまとめ、大谷大学通史の編纂に取り組んで行くこととした。

特定研究

国際仏教研究
—諸外国における仏教受容の様相の研究—

研究員・チーフ　多田　稔
（国際文化学）

1995年度の研究活動は、昨年度からの課題を引き継ぎ、国際真宗学会第6回大会報告の編集・刊行に全力を注いだ。

具体的には、昨年の継続として、多田チーフ研究員を中心としてパネル総括のための検討会、翻訳検討会をくり返しもった。そして本研究班の研究成果として、1995年12月8日、大谷大学真宗総合研究所より『大乗の至極 浄土真宗 国際真宗学会第6回大会報告』（B5版・303頁）が刊行され、関係の諸氏・諸機関に送付された。

この大会における、4つのパネルディスカッションをまとめ、紹介することの意義については、多田チーフ研究員の次の講につくされている。

「思うに、この刊行は、単に一つの大会の報告書にとどまるものではない。パネルにおけるこれらの発表は、海外の研究者のほとんどがそうであるように、真宗学のプロパーによる発表ではない。ここに流れているのは、真宗の教義をどのように解釈するかという関心ではなく、真宗は人類の究極的な問題にどう応えることができるのか、というラディカルな関心である。この大会おいて設けられた四つのテーマは、おそらく真宗が国際社会に紹介されていくときにどうしても問われる課題である。また真宗が、民族や宗派という枠組みを越えていこうとするとき、どうしても通らなくてはならない関門だと思う。この関心にこたえられない真宗の学は結局、その枠組みをこえていくことはできないであろう。

この報告が、大谷大学が諸外国との対話を実現し、大谷大学が国際社会において果たすべき役割を見出すための一つの指標となってほしい。このことが、翻訳を完成させる前に、それぞれのパネルディスカッションの総括を研究班全体の課題とし、またこの報告書の作成をもって国際仏教研究班の研究成果とした理由である。この報告書が熟読されることを期待する。（序より転載）」

『大乗の至極 浄土真宗 国際真宗学会第6回大会報告』の概要は以下の通り。

Ⅰ

緒言　訓覇曄雄（本学学長）
序　多田　稔（チーフ研究員）

Ⅱ

公開講演

テキストとヴィジョンとその具現化－浄土を想像する　ルイス・O・ゴメス
信仰のダイナミックス—回向と願生　寺川俊昭

Ⅲ

パネルディスカッション

Panel 1 往生—現代における救いの問題
Panel 1 まとめ　加来雄之（研究員）
Panel 2 対話上の諸問題—多元世界と浄土真宗
Panel 2 まとめ　樋口章信（研究員）
Panel 3 言葉と解釈—聖典の翻訳をめぐって
Panel 3 まとめ　ロバート・F・ローズ（研究員）
Panel 4 精神主義の意義—近代における浄土真宗の表現
Panel 4 まとめ　安冨信哉（研究員）

Ⅳ

大会記録
編集後記

上述の研究に加え、本年度も、初年度の計画に基づき以下の基礎研究を行った。

(1) 海外の研究者を招いての研究会
11月22日(水) 16時10分　博綜館第5会議室
Meaning and Referent: An Indian Perspective
講師　V. N. Jha 教授（プーナ大学サンスクリット語高等研究所所長）
司会　多田　稔　チーフ（本学教授）

(2) 研究員による定期的な研究会
5月18日(木) 16時10分　博綜館小会議室1
宮下晴輝研究員　パネル1のまとめ検討会
6月14日(水) 16時10分　博綜館小会議室1
国際真宗学会第6回大会の報告について
11月14日(火) 12時10分　博綜館小会議室1
国際真宗学会第6回大会のパネル報告について
2月29日(木) 17時　カーサビアンカ
『大乗の至極 浄土真宗　国際真宗学会第6回大会報

告』刊行記念懇談会

(3) 海外の学会への研究員の派遣

国際真宗学会第７回大会

８月21日より23日まで、ハワイのホノルルで国際真宗学会第７回大会が開催され、宮下晴輝研究員、樋口章信研究員、渡辺啓真研究員、加来雄之研究員が参加した。

AAR(The American Academy of Religions)

11月18日より21日まで、ニューヨーク・フィラデルフィア（ペンシルバニア州）においてアメリカ宗教学会が開催され、ロバート・F・ローズ研究員が参加した。

(4) 欧文の仏教関係書籍ならびに論文の収集とデーターベース化。

本年度も、資料収集とデーターベースへの入力という基礎作業を継続して行つた。

（報告者　加来雄之）

委託研究

真宗史料研究
—東本願寺近世近代史料の整理ならびに『真宗史料叢刊』の編纂—

研究員・チーフ　名畑　崇
（日本仏教史学）

本研究は1991年、研究課題「東本願寺近世近代史料の研究と翻刻並びに出版」のもとに発足した。東本願寺所管の園林文庫の整理を委託され、その作業を含め近世近代の東本願寺関係史料の調査研究およびそれら史料の翻刻・刊行を行うことをめざしている。

その研究意義・目的は、近世近代の国家と宗教のかかわりを明らかにし、宗内近代史の検証と大谷大学史の研究に資すること（1991年度研究企画）。また計画と方法については、①未整理の宗務所史料の整理。②記録所文書・園林文庫の内容調査。③大谷大学図書館所蔵粟津家記録など内容と調査。④上記史料のうち公刊すべきものの翻刻、原稿化・刊行準備としている（同上）。

研究期間については、園林文庫の調査は当初１～２年ということであったが、詳細な調査方法により調査に着手したところ、１～２年では到底無理と判断された。それにあわせて東本願寺近世近代史料を翻刻・刊行するには相当の年数継続を要する。これらのことが本山・大学・研究班の当事者間で申合わされ、研究が発足した。

作業を開始して１期３年が終り、作業は２期に入り２年が経過した。これまでの進捗状況については毎年研究所委員会に報告し、作業の内容を『研究所報』に掲載してきたところである。園林文庫の調査を継続しデータ・ベース化を進め、一方で東本願寺近世近代史料の一部である『家臣団名簿』編纂・『粟津日記』の翻刻・原稿化を行い刊行の計画段階を迎えた。

1995年度の提出の研究企画（案）は、これまで作業の進捗状況により研究課題を表記のごとく掲げ、成果を公刊するため予算を提示した。ところが1995年７月のチーフ会議において、当研究の初期の目的は園林文庫の史料調査であり、年限も１～２年ということで、東本願寺近世近代史料の翻刻・刊行等は計画になく途中で変更されたのか、との指摘があった。研究発足以来「研究企画」を毎年提出して承認を得、作業を進めてきた研究班にとっては意外な指摘であった。ことは園林文庫整理の委託を受けた経緯、研究班発足当初の事情と当事者間の申合わせ、研究計画についての確認にかかわり調査を要する。そのため史料出版の予算計上は見合わされ、当面の作業は園林文庫の史料調査にしぼり、目録作成（データーベース化）に集中することになった。なお『家臣団名簿』編纂および『粟津日記』翻刻の原稿は真宗史料研究室に保管されてる。

以下1995年度の園林文庫史料の調査実施状況を整理カード作成枚数（点数）にもとづいて報告し、ついでそれら整理カードのデーター・ベース化の進捗状況について報告する。

園林文庫整理カードの作成も５年を経過し、数字をみてもわかる通り、作業は順調に進んでいるといってよい。作業の達成率をみてみると、ダンボールにして半数、旧目録点数にして約７割の整理を終えたことになる。両者の数字にひらきがあるのは、一箱中の文書の数が多いものから処理しているためであり、全体的にみると作業の達成率は旧目録点数の数字に近いことになる。つまり、一概にはいえないが、現時点では約６割強の作業を達成したこととなる。本年度は、総計4075枚のカードを作成することができ、５年間の総カード作成数も２万枚を越え、作業は全体的によいペースを持続しているといえる。しかし、今後の整理作業について問題がないわけではない。

まず第一に、スタッフ確保の問題がある。古文書整理という仕事の性格上、古文書読解という特殊な能力を有

するスタッフを、毎年一定数確保しなければならない。また、整理しているものの大半が近世近代の本山に関するものという史料の性格上、特別な歴史的知識を必要とする、あるいは非常に繁雑な史料をひとつひとつ丁寧に処理しなければならないという作業の性格上、一人前に仕事をこなすためには多くの経験を必要とし、これらのことから、確保したスタッフを育成していかなければならない、ということである。さらに第二に、作業効率の問題がある。本作業も既に5年を経過し、確かにより一層の効率アップをめざす必要があり、そのために改善するべき部分については改善をしてきてはいるが、既述のように非常に繁雑であるという史料の性格を考えると、効率アップのために安易に作業を簡略化し、このことによって必要なデータをとり漏らすことがあってはならない。

そのために、これからも作業の効率アップのための努力を惜しむことは許されないが、基本的には現行の方式を守っていくべきであろう。以上のような事由から、カード作成についてはこれまでと同様の、あるいはこれ以上のペースを今後も持続していくということは、非常に困難なことであると考えられる。

カード作成作業も約6割を終え、今後はこの膨大な数のカードを整理し、目録の編纂事業、あるいはコンピュータのデータベース化といったまとめのことも視野にいれていかなければならない。つまり、検索のための内容分類やカードの記入漏れ、あるいは略字や異体字といった字体の問題など、まだまだ山積している多くの問題にたいして本格的にとり組んでいかなければならないであろう。

園林文庫整理カードコンピュータ入力作業状況について。入力作業に関しては、昨年度、データ入力専属という形で確保した二名の作業員に、本年度はさらに一名の専属作業員を加えて、少なくとも、常時二名によるデータ入力作業が定型化したと思われる。それは、昨年度導入したデスクトップ型とノート型コンピュータというハード面における環境整備が、その大きな理由としてあげられる。

具体的には、昨年度入力総数＝約3,400件に比べて、本年度は約1.7倍＝約5,700件の入力件数となった。以下に、本年度入力「箱」および入力データ件数の内訳を列記する。

第六箱＝95件、第八箱＝6件、第十二箱＝120件、第十九箱＝56件、第二十三箱＝本年度分220件、第二十五箱＝148件、第二十六箱＝115件、第三十一箱＝816件、第三十三箱＝1,743件、第三十四箱＝93件、第三十五箱＝609件、第三十六箱＝153件、第三十七箱＝39件、第三十八箱＝409件、第三十九箱＝850件、第六十五箱＝259件、以上、入力件数の合計＝5,731件

これに昨年度までの入力件数を加えれば、約12,000件のデータを入力した計算となり、単純に計算すると、「園林文庫整理カード」枚数全体の約半分（園林文庫全「箱」数の内、現在、半分の「箱」が整理済み）ということになる。このように入力データ件数に関しては、順調に一定の成果をあげてきているといえよう。とはいえ、カード総枚数の半分が未入力であることを念頭におけば、来年度も、上記の入力作業環境の確保を要望したい。

なお入力作業は、現在、入力作業マニュアルに基づいておこなっているが、様々な問題点が指摘されている。たとえば、入力「文字」がその一つである。史料の性格上、データ入力に際して「原文」の入力が不可欠であるのだが、その場合に、コンピュータの辞書にない正字や、異体字・俗字などをどのように処理すべきかという問題である。また調査・整理それ自体についても、その性格上から、多少のブレがでてきており、そうした個々の関係性を如何に記述し得るのかという問題も生じてきている。その意味で、今後は、歴史学・古文書学の研究成果を十分にふまえ、それに対応したデータベースの設計を模索していく必要がある。史料の公開・刊行、データの共有化といった問題を含めて、継続的な史料の調査研究、作業環境の整備が求められるといえよう。

委託研究

西蔵文献研究
—大谷大学所蔵の北京版大蔵経および蔵外文献の研究—

研究員・チーフ　小川　一乗
（仏教学）

本研究は、大谷大学図書館が所蔵するチベット語文献を整理・研究すると共に、貴重な文献を内外に紹介することを目的にしたものである。1995年度は、丹殊爾勘同目録の続刊の原稿の作成、パーソナルコンピュータ・マッキントッシュ用のチベット語システムの開発の二つを進めた。

丹殊爾勘同目録は、Ⅱ-2（諸経疏部・唯識部・阿毘達磨部を合わせたもの）の原稿が完成し、初校に入った。

予想した以上に原稿の注記部分に手間取ったため、予定のスケジュールより遅れているが、今後鋭意校正作業を進めるつもりである。一方、次のⅡ-3（律疏部・本生部・書翰部・因明部・声明部・医方明部・雑部）の原稿作成は、Ⅱ-2の校正をしながら作業を進めたが、次年度には終了する予定である。このⅡ-3で丹殊爾勘同目録は完結することになる。

一昨年度より開発を進めてきたパーソナルコンピュータ・マッキントッシュ用のチベット語システムは幾つかの手直しをして、1995年5月に完成した。マニュアルも英語と日本語の2種類を用意した。マッキントッシュのメーカーであるアップル社から同社の所有する機能拡張ソフト（WorldScript Ⅰ）の添付許可も正式に得られ、配布することに対する障害もなくなった。チベット語システムの名称はアップル社の助言もあって、Tibetan Language Kit for Macintoshとすることになった。

同年6月18日(日)から24日(土)まで、国際チベット学会（International Association for Tibetan Studies）の第7回学術大会が、オーストリアの古都グラーツ近郊のライプニッツにおいて開催された。我々はこの学会を開発したチベット語システムの発表の場と考えていたため、当西蔵文献研究班から、白館戒雲（研究員）、兵藤一夫（研究員）、今枝由郎（嘱託研究員）、Steven Hartwell、三宅伸一郎（以上2名は当研究班から参加を特別に依頼）の5名が参加した。学会では、白館研究員は自身の出身地であるシェカルの仏教史について発表し、他の4名はマッキントッシュ用のチベット語システムTibetan Language Kit for Macintoshやそれを利用しての目録作製などについて発表した。そして希望者にそのシステム（フロッピーディスクと英文マニュアル）を無料で配付した。また、当研究班の嘱託研究員でもある東洋文庫の福田洋一氏は当該チベット語システムにおいて利用できるユーティリティー（コンバーターなど）と目録作製について発表した。学会期間中、学会参加者にデモンストレーションをしながら説明をしたが、福田洋一氏作製のユーティリティー（コンバーターなど）と合わせて相当な関心が持たれ、その使いやすさ・機能性など好評であった。（この国際チベット学会に関してはすでに『大谷大学真宗総合研究所報』No.34、1996年7月、で報告しているので、それを参照していただきたい。）

また、1995年11月には、大谷大学において第43回日本西蔵学会学術大会が開催された。当研究班はその大会の実行に対して中心的な役割を果たすとともに、その大会においても当該チベット語システム（フロッピーディスクと日本語マニュアル）を希望者に無料で配付した。

当研究班では、当該チベット語システムTibetan Language Kit for Macintoshを利用して目録を作製したり文献を入力して、データベース化することを目指している。1995年度は、チベット語システムのテストを兼ねて作製してきた大谷大学所蔵蔵外文献目録と金写版西蔵大蔵経目録がほぼ実用出来る段階になっている。次年度からは所蔵文献の中から幾づかを選んで、入力を開始する予定である。

委託研究

大蔵経学術用語研究
—『大正新脩大蔵経』経集部関係典籍における学術用語の研究—

研究員・チーフ　鍵主　良敬
（仏教学）

本研究は、仏教典籍の一大叢書である『大正新脩大蔵経』の学術用語の研究を通して、人類の貴重な知的文化遺産である仏教を広く世界に公開することを目的としている。

『大正新脩大蔵経』は、今日漢訳された経律論を収録する大蔵経としてはもっとも整備されたものである。従って今日、何らかの形で仏教研究に携わるものにとっての標準として全世界の仏教研究者に利用されている。一口に仏教研究といっても様々な関心の持ち方の違いや、目的の相違があり、『大正新脩大蔵経』は極めて多様に利用されている。そして、東洋的な英知の結晶であり膨大な量と無尽の内容を含む大蔵経が幅広く多くの人々に利用できるようにするために様々な工夫が為されてきたのであるが、『大正新脩大蔵経索引』はその代表的なものである。

『大正新脩大蔵経索引』は、大蔵経を広く全世界に公開し、仏教を人類に開放するために企画されたものである。この目的の達成のために、仏教系六大学(大谷・龍谷・高野山・駒沢・大正・立正)によって大蔵経学術用語研究会が組織され、それぞれの大学が分担して『大正新脩大蔵経』の収録典籍の内容を研究し、学術用語を整理して、その結果を『大正新脩大蔵経索引』として出版してきたのである。しかし、出版当時は最新の研究結果の報告であった『大正新脩大蔵経索引』であるが、仏教研究の進展はめざましく、その後の研究成果を反映したものに改訂する必要が生じてきたのである。

本研究は、このような状況の下で、大谷大学がかつて責任を持って編集出版した『大正新脩大蔵経索引経集部下』の改訂版を出版することが研究目的である。『大正新脩大蔵経索引経集部下』は、本学が昭和44年に責任編集したものである。これは、『大正新脩大蔵経』第16巻と第17巻に収められるNo.656菩薩瓔珞経からNo.847大乗菩薩行門諸経要集までの学術用語研究の結果を、1、収録典籍解題　2、凡例　3、音次索引　4、分類項目別索引　5、検字索引の組織に従って整理したものである。従って改訂版を出版するためにはいくつかの点の検討が必要であるが、今年度は現行の索引の現状を知り、問題点を明らかにすることが主な課題となった。その詳細はかなり込み入った問題にわたるので今は差し控えたい。ただ一つ、その検討作業の中から明らかになってきたこととして、今後の仏教研究におけるコンピュータ利用の問題を挙げておこう。現今におけるコンピュータの普及はめざましいものがあり、この点はここで云々する必要のないことと思う。その流れは仏教研究にも波及しており、もっとも顕著な現象として仏教典籍の電子化ということを挙げることができる。仏典などをテキストデータベース化して、検索・通信などに利用しようというのである。このような試みは、国内・国外をとわず以前から行われていたことであるが、昨今になって非常に大きな流れとなってきたのである。これは、現下の国際化・情報化社会を反映していると言えるが、仏教研究もその例外ではないことを表している。このような流れの中にあって本研究でも大蔵経のテキストデータベース化の流れに対応し、現状の問題点と今後の仏教研究のあり方を模索していかなければならないことが確認された。そこで、現状において先進的に作業を進めつつある研究機関と連携して、『大正新脩大蔵経』のテキストデータの作成の作業に取り組むこととなった。具体的には、東京大学印度哲学研究室などで行っている入力作業・校正作業の具体的な方法を学ぶことから始めた。今年度は、大蔵経をOCR（OPTICAL CARACTER READ）入力していくための、ハード面の整備とOCR入力ソフトの選定、ならびに同ソフトを使っての入力の実際を実験的に行った。とにかく初めての作業なので、よく分からないことも多かった。特にハード面の問題は個人の努力ではすまない問題を含んでおり、今後に課題を残している。また、漢文文献のテキスト化にあたっては文字の問題が極めて深刻な問題として存在している。特に大蔵経には最も大きな漢和辞典にも載っていないような文字が含まれており、このことは漢字文化の偉大さと中国仏教の広大さを物語るのであるが、この点は現状のJIS規格などでは全く間に合わないのである。また、グレップという検索機能は現行の一字索引などよりもよほど使い道のあるものであるが、場合によっては、経典を読まないで仏教を研究するなどといった本末顛倒した仏教研究が成り立ちうる可能性を秘めている。このように、始まったばかりのテキストデータによる仏教研究には多くの問題点をはらんでいるが、いずれにしても仏教研究におけるコンピュータ利用は避けては通れない課題であり、ネットワーク社会に向けて基本的な原則が確立されねばならない時期にきているということができる。このような現状にあって仏教によって立つ本学がどのような役割を果たしていかなければならないかが厳しく問われているわけである。本研究は、『大正新脩大蔵経索引経集部』を再点検するということが当面の課題であるが、それに留まらず、仏教研究におけるコンピュータ利用という今日的な課題にも針路を開いていかなければならないという点が今年度の様々な検討を通して明らかになった。

1995(平成７)年度「一般研究」研究結果概要

共同研究

近代における仏教研究の方法論
—近代の仏教研究における清沢満之の地位と基礎資料の検討—

研究代表者　神戸　和麿
(真宗学)

本学の学祖である清沢満之は近代における仏教研究に大きな視座を与えた。その仕事に対しては、いくつもの先行研究があるが、清沢の仏教研究の方針と思想が当時の仏教研究・哲学研究の思想状況の中でどのような位置づけをもったかについては充分に明らかにされているとはいえない。特に今日、近代における仏教研究の方法論が根底から問われている中で、その出発点において清沢の果たした役割が明確にされる必要があると考える。ここに本研究の大きな目的がある。

しかしながら、これまでの清沢研究の基本資料であった『清沢満之全集』全８巻（法蔵館刊）が絶版となっている今日、清沢研究のための基礎資料が内外から求められている。そのため本研究では、上記の目的を完遂するためにも、さし迫った課題である清沢の全集作成のための方法を検討してきた。

本研究は２ヵ年計画で進めているが、1995年度は全集の基本構想を具体的に練るために、既刊の全集をふまえての検討を重ねた。また、清沢の全集や文集を作成された西村見暁氏や寺川俊昭氏を招いて研究会を開催した。さらにこれまでのコンピューター入力の成果を承けて、電子出版をにらんで清沢の基礎資料のデータベース化の作業も進めている。

その作業の中で、基本資料に検討を加えていくには、清沢の自筆原稿との対校が是非とも必要になるので、自筆原稿の所在についても調査を進めた。まだすべてではないが、主要なものについては所在の確認ができている。また、清沢の原資料の内、公刊されたものについては校訂作業を終え、それを元にして学生にとって読みやすい基本テキストの作成作業にも着手している。1996年度には公にできるように準備を進めている。

以上、2ヵ年計画で立ち上げたこともあって、作業の進捗状況の羅列にとどまったが、本年度の報告とさせていただく。

共同研究

日本思想の歴史的・総合的研究

研究代表者　大河内　了義
(ドイツ文学)

1994年度に引き続き、1995年度も一般研究として認められた上記の共同研究は、学内外の共同研究者を得ておおよそ次のような経過をたどって進められた。

まず、1994年度一年にわたってさまざまな模索を続けた結果明らかになってきたことは、ヨーロッパにおいて発生し、展開して体系化され、さらに現代においてそれの「脱構築」がおこなわれつつある「哲学」なるものにそのまま対応するものは、東洋ないし日本にはないこと、したがって日本の諸思想を「哲学」として跡づけるためには

(1)「哲学」なる概念がヨーロッパ自身においてどのような変貌を遂げたか

(2)それに対して日本の場合に、「思想」が「哲学」的な意味でいかなる状態にあったか、また現にあるかを明確に把握しなければならない

ということであった。

この問題はすでに1994年度の研究討論の結果ほぼ明らかになったので、年度の一応の締めくくりとして、すでに1995年３月13日に、本学教授の箕浦恵了氏によって「古代ギリシャにおける〈哲学〉という名前と概念」と題した報告がなされ討論された。95年度はそれを承けて４月22日第一回の会合を開き、次のようなプランを立てた。

０．打ち合せ会　[1995.4.22]

１．古代ギリシャにおける「哲学」という名前と概念　[1995.5.18　箕浦]

２．中世における「哲学」という名前と概念　[1995.9　小浜]

３．近世における「哲学」という名前と概念
　デカルトからヘーゲルまで　[1995.7.20　須藤、門脇]
　ロックからヒュームまで　[1995.6.13　冨田]

４．キルケゴール、マルクス、ベルクソンらの「哲学」という名前と概念　[武田]

5．現代における哲学の脱構築
　1．ドイツ（フッサール、シェーラー、ハイデガー）
　　［1995.10　池上、伊藤］
　2．フランス（サルトル、メルロ＝ポンティ、フーコー、デリダ）　［1995.6.2　水野］
　3．アメリカを中心に　［1995.6.13　富田］
6．哲学（思想）としての佛教（インド、中国、日本）
　　［宮下］
7．哲学（思想）としての真宗　［延塚］
8．哲学（思想）としての儒教　［辻本］
9．明治以降の日本の哲学　［堀尾］
10　まとめ
　日本の哲学(思想)の歴史を辿るとき
　　1.流れをとらえ、その上で
　　2.誰のどんな著作を取りあげ
　　3.誰が執筆するか

報告者の都合などもあって、必ずしもこのプラン通りには進捗しなかったが、大筋ではこれに従って以下のような諸報告がなされ、討論が行われた。

1995年6月2日　神戸大学　水野和久氏
「現代における哲学の脱構築―フランスを中心に―」
6月13日　京都大学　富田恭彦氏
「古典的イギリス経験論と現代アメリカ哲学」
7月20日　大谷大学　須藤訓任・門脇健
「近世における〈哲学〉という名前と概念―デカルトからヘーゲルまで―」
10月6日　神戸市外国語大学　小浜善信氏
「中世における〈哲学〉という名前と概念」
11月7日　京都大学　辻本雅史氏
「哲学（思想）としての儒教」
12月22日　大谷大学　延塚知道
「哲学（思想）としての真宗」
大谷大学　宮下晴輝
「哲学（思想）としての佛教」
1996年1月11日　大谷大学　堀尾　孟
「明治以降の日本の哲学」
2月28・29日　まとめ

一方、1995年8月大河内が渡欧し、まずBaselにSchwabe社を訪ねて担当のDr. Wolfgang Rother氏に会って、研究のその後の進捗状況を報告し、かつ先方の希望なども徴した。その上で、Rother氏の希望にしたがってZürichに赴き、Schwabe社の精神科学出版部門の顧問であり、かつスイス科学アカデミー会長であるProf. Dr. Helmut Holzhey氏（チューリッヒ大学教授）と会見し、共通の友人であるvon Castelberg夫人の私邸に招かれて夕食を共にしつつ話し合いを重ねた。Schwabe社としては、日本語原稿の文意のÜbersetzbarkeitを強く要望したが、それをはじめから念頭におくと、研究およびその論述に枠をはめることになるという理由で、これを撤回してもらい、無前提でまず日本語の草稿を作製し、その上で翻訳の問題を考えるということに決定した。

その日本語草稿をいかにして作製するかが1996年2月28・29日両日にわたって関西セミナーハウスで行われた合宿の際の主要テーマとなった。

さまざまな思想領域や時代状況から問題に迫った結果、いくつかの点は明確になったものの、それらを線として、更に面へと拡大展開することは、テーマが巨大かつ広範囲にわたるものであるため、今後の研究に期すほかないという点で意見の一致をみた。今後は「一般研究」の枠外で一層の努力をし合うことを確認した。

共同研究

唐代釈教文の研究

研究代表者　河内　昭円
（中国文学）

平成六年度は、盛唐から中唐初期にかけての文人李華の釈教文十一首を読み終えた。研究の継続が認められた平成七年度は、独孤及文三首、梁粛文四首、権徳輿文六首の釈教文凡て十三首を読了した。独孤及の釈教文三首とその担当者は次の通りである。

舒州山谷寺上方禅門第三祖璨大師塔銘（西山　進）
舒州山谷寺覚寂塔隋鏡智禅師碑銘并序（大内文雄）
揚州慶雲寺律師一公塔銘并序（河内昭円）

梁粛の釈教文四首とその担当者は次の通りである。

越州開元寺律和尚塔銘碑并序（佐藤義寛）常州建安寺止観院記（西尾賢隆）台州隋故智者大師修禅道場碑銘并序（島津京淳）止観統例（山野俊郎）

また権徳輿のそれは次の通りである。

潤州昭代寺比丘尼元応墓誌銘并序（今場正美）東京安国寺契徴和尚塔銘并序（西山　進）洪州開元寺石門道一禅師塔銘弁序（織田顕祐）章敬寺百厳大師碑銘并序（渡部　洋）宝応寺座内道場臨壇大律師多

宝塔銘并序（浦山あゆみ）大興善寺故大宏教大弁正三蔵和尚影堂碣銘（若槻俊秀）

注解においては李華の場合と同様に、整理の都合上まったく便宜的に『全唐文』を基本テキストとして用いたが、『唐文粋』・『文苑英華』および四部叢刊・四庫全書所収の各本集をもって校勘した。この時代の作者を扱う場合、テキストの選定に苦しむのが常である。

李華に続いて独孤及・梁粛・権徳輿を読むについては、もとより一定の意図が存する。周知のごとくこれらの文人は中唐初期に名の知れた古文家である。しかもこの人たちは相互に密接な関係を有する一個の集団であった。独孤及は李華の門に出で、梁粛は独孤及の門人であった。梁粛は李華が没すると独孤及に代わって李華の祭文を書き、独孤及が亡くなるとまたその祭文を撰し、さらにその遺稿を整理して文集の後序を書いている。権徳輿の父権皋が没すると李華がその墓表を書き、権徳輿の母李氏が亡くなると、梁粛がその墓誌銘を撰した。権徳輿はまた独孤及および梁粛のためにそれぞれの祭文を書いているのである。この集団はまた、左遷・任官・出生等の事由をもって江南の地に地縁を共有している点も見逃せない。要するに古文家の仏教と江南の仏教の実態を検証してみたいという意図を有していたのである。

李華が興味を示した仏教、あるいは当時における江南仏教の趨勢については、前年度研究概要に報告をなした。すなわち釈教文を通して見る李華の仏教は、天台宗・律宗・北宗・牛頭宗との関係が密接であり、その事実は同時に当時における江南仏教の趨勢を示していたといえる。独孤及・梁粛および前半期の権徳輿の仏教は、概して同一の傾向にり、江南の地域仏教も同様にとらえることができる。大きな変化を窺わせるのは、これらの文人のなかで時代をもっとも遅くまで生きた権徳輿の後半期である。

権徳輿の「洪州開元寺石門道一禅師塔銘并序」は慧能—懐譲—道一と次第する馬祖道一のための碑文であり、「章敬寺百厳大師碑銘并序」は馬祖の高足懐暉の碑文である。この文人の後半生は、礼部侍郎・兵部侍郎・吏部侍郎・太常卿・礼部尚書同中書門下平章事・山南西道節度使など、徳宗朝晩期および憲宗朝に重きをなした。江南を離れて長安に居を移した権徳輿は、転向ともいうべき変化を見せるのである。しかもこの事実は、南方に展開していた慧能系の南宗が中央に進出し、それ以降の仏教界が南宗禅に傾斜していく時期と符合する。唐代釈教文の注解作業は、このような時代の変化を明確にとらえたと思う。

共同研究

仏教保育研究
—その現状・理念・教育体系について—

研究代表者　佐賀枝夏文
（社会福祉学）

他機関との連携について

仏教保育研究班は、研究初年度より推進してきた大谷保育協会との連携が所期の目的を達成し、次の段階として幼稚園教諭養成、保母養成及び研究機関としての役割を如何に担うかという本質的な展開期に入った。今後連携を深める段階としては、同協会の会員園が希求する「真宗保育」に関する諸研究資料の収集や蓄積であり、同研究班が進めている研究内容を公開することから始めなければならない。

連携に関する関連の報告として、1996年1月に本学と同一法人九州大谷短期大学の開学25周年記念事業として「九州大谷幼児教育・福祉学会」が発足し、記念大会が開催された。記念大会に同研究班の佐賀枝が参加し、報告の機会を得て相互の連携の重要性を確認することができた。

今後の展開として、本学と大谷保育協会との連携を最重要課題とし、本学と九州大谷短期大学の連携を深め、さらに北海道地区、東海地区などの関連短大に拡大していくことであろう。本研究を手がかりとして、真宗大谷派の幼児教育・保育事業が研究養成機関とともに連携し、新たな展開期に入った。

仏教保育史と人物史の発掘作業について

近代以降の保育事業はわが国の近代化のあゆみと重なりながら、発展の歴史を歩んできた。仏教保育と極めて深い関係にあった人物とその業績の発掘作業を継続して行っている。わが国の保育史に大きな足跡を残した瓜生岩（1829～1897）の人物像の掘りおこしの作業を終えた。その作業から、瓜生の人生の「転身」ともいえるものが明らかになった。苦渋と悲しみの前半期をバネに回心ともいえる転身を契機として菩薩行へ身を投じていく姿に、仏教保育実践家の生き方を発見できたようにおもう。また、浄土真宗本願寺派の九条武子（1887～1928）の人物史と業績の調査からも、瓜生と同じく回心ともいえる

転身を発見することができる。関東大震災のおり、すべてのものを失った「喪失体験」を契機として、実践活動に身を挺していく姿に「宗教的自覚」ともいえる転身を発見することができる。瓜生と九条に共通する転身こそ仏教保育実践の原点であるといえるであろう。真宗大谷派の奥村五百子（1845～1907）の生育歴と実践の歴史に学ぶところは大いにある、奥村の実践の原点も瓜生や九条と同様に「いのち」への限りなさ尊重が起点である。奥村の実践活動は軍国主義の時代と国家機構に飲み込まれた形で、奥村を「時代の子」としていくところに問題があったといえるであろう。

大谷瑩韶(1886～1962)の児童教化面における啓蒙家としての業績は、看過できないものがある。瑩韶の「児童教化」への情熱は機関雑誌『ほとけの子』や『児童と教化』に結実し、派内における児童教化の隆盛期を築いた。今後の課題として両雑誌の収集と公開の仕事が継続課題として残ったといえるであろう。

「真宗保育」研究の枠組みについて

研究の成果と今後の展望として、「真宗保育」研究の枠組みは以下のように提示できる。

1．歴史的な背景と位置づけ
　①大谷保育協会のあゆみについて
　　協会設立まで（大谷派慈善協会、大谷派児童協会、大谷派社会事業協会、大谷派婦人法話会、本山社会課）
　　協会設立 協会黎明期 協会発展期 協会充実期
　　協会の略年譜
　②先覚者のあゆみについて
　　明治時代（瓜生岩、奥村五百子）
　　大正時代（九条武子）
　　昭和時代（大谷瑩韶）
2．真宗保育について
　①真宗保育について歴史的な研究
　　a資産としての『ほとけの子』の発掘作業
　　b資産としての『救済』の発掘作業
　　c資産としての『児童と教化』の発掘作業
　②真宗保育と現代社会
　　a市場経済が生み出す諸問題
3．真宗保育の実践について
　①真宗保育の目指すもの
　②真宗保育の実践者養成（カリキュラム）
　③真宗保育者の現任研修・訓練
　・園長、主事、主任、中堅、初任研修等
　・現任教育(大谷派関連養成校のネットワークづくり)
　④真宗保育で育つとは
4．真宗保育と保護者について
　①その位置づけ
　②教化対策について

個人研究
『選択本願念仏集』の研究

研究代表者　安藤　文雄
（真宗学）

本研究の目的は『選択本願念仏集』（以下『選択集』と略称）の思想的な読み込みによって、法然の仏教観を浮き彫りにするということであった。昨年度の一年間の研究において、『選択集』の本文に即しての検討にまでは至らなかった。しかし、三木彰円・大神栄治の二名の研究補助員の協力を得て、研究を進めるにあたっての基礎作業はほぼ終えることができた。昨年度の研究作業と成果は下記の通りである。

1、『選択集』の諸本校訂としては、廬山寺本・往生院本・延応本の漢文テキスト、廬山寺本延書・『定本親鸞聖人全集』第六巻延書・『真宗聖教全書』第一巻所収テキスト延書のコンピューター入力を行なった。本文それぞれを比較しての校訂は行なっていないが、すでに入力済みであるので、いつでも必要に応じての校訂作業は可能な状態にある（ただし江戸期の刊本は入力していない)。また、『選択集』以外の法然関係資料として、『西方指南抄』(『定本親鸞聖人全集』第五巻)・『漢語灯録』所収『三部経釈』延書（『真宗聖教全書』第四巻）の作成、『定本親鸞聖人全集』第六巻所収の『三部経釈』・『唯信鈔』の入力も行なった。

2、『選択集』への批判から、法然の仏教観を明確にするために資料を作成した。まず、いくつかの年表（『真宗年表』・『仏教史年表』・『年表日本歴史』）を組み合わせて、「法然関係年表」を作成した。また『選択集』批判の基本資料である『摧邪輪』『摧邪輪荘厳記』を、寛永版本を底本とした延書として印刷製本した。『摧邪輪』の研究成果としては、昨年度沖縄国際大学で開催された日本宗教学会学術大会において、『選択集』と『摧邪輪』について、その念仏観を問題とする研究発表を行なった。

最初に予定していた『選択本願念仏集』の研究史を概

観するための、諸註釈書の収集、『選択本願念仏集』にかんする雑誌論文の収集は時間と費用の関係で行なえなかった。

以上が昨年度の研究における成果である。研究のための基本資料の作成はある程度行なえたと思うが、その思想的な検討は今後の課題としたい。『選択集』への批判も含めた多角的な研究を踏まえて、他大学の研究者との交流も視野に入れつつ、『選択集』に表現されている法然の仏教観の本質を明確にしたいと思つている。

個人研究
高木顕明の研究

研究代表者　泉　　惠機
（人権論・同和教育）

高木顕明に関する研究は、今までほとんど手がつけられてこなかったと言える。その最大の理由は、大逆事件という事件の特異な性格によるものと思われるが、さらに、彼が属した教団である真宗大谷派内部でほとんど忘却し去られていたこともその理由であろう。

高木顕明研究については、名古屋時代、新宮時代、さらに獄死から遺族の動向までの年譜作成、被差別部落との関わり、廃娼運動、非戦論、大逆事件における顕明の位置－特に新宮における他の連座者との関係やその位置づけ、連座者中の僧侶や寺院出身者との比較研究、顕明の「社会主義」と仏教思想（真宗信仰）、明治後期の大谷派の教学思想における位置、明治後期の日本の仏教者とその思想における位置、遺族の行方、などの要素、あるいは側面があると考えられる。

高木顕明を正面から取り扱った今まで研究としては、伊串英治「無実の犠牲者高木顕明」（『資料日本社会運動史』第4号1958年）、「高木顕明の名古屋時代」（『大逆事件ニュース』第13号1966年）などの一連の研究、吉田久一『日本近代仏教史研究』（1958年）、および高木道明「大逆事件と部落問題－高木顕明の人と思想－」（部落問題研究』第28輯1970年）の三つを数えるのみであるが、上のすべての側面を包括した研究ではない。

また、高木顕明自身がほとんど記録を残していないことや、また顕明の研究のみならず大逆事件研究の最重要資料である訴訟記録等の裁判資料の多くが公開されていないし、公開への今後の見通しも暗いという事情がある。それゆえ今回の一般研究「高木顕明の研究」においては、限られた資料によるものであるが、まず出来る限り正確な年譜を作成するために、すでに出版されているもの以外の資料収集と聞き取りを主とした。

そのために、新宮市を中心とする和歌山県下への調査と、名古屋市、浜松市近辺の調査、後述する東京での二つの研究会への参加、大谷派宗務所所蔵資料調査を中心に行った。

和歌山県では、新宮市の浄泉寺、市立図書館、郷土史家、被差別部落等を訪ねるとともに、和歌山県立図書館所蔵の「熊野新報」、「熊野実業新聞」、「紀伊毎日新聞」や、和歌山大学紀州経済史文化史研究所所蔵の資料や「牟婁新報」などを調査した。

また、顕明の名古屋時代や墓石、遺家族の足取りに関しては、名古屋では法蔵寺、道仁寺、愛知県立図書館、浜松市では墓石調査や、顕明の養女であった加代子の親族、芸者として働いた仲間の人々や、磐田市の天理教高代分教会を訪ねて、資料収集、聞き取り、写真撮影などを行った。

東京では、1961年に行われた坂本清馬らによる大逆事件の再審請求を機に設けられた「大逆事件の真実をあきらかにする会」に参加するとともに、多くの資料提供をうけた。また、沖野岩三郎、与謝野鉄幹を通して高木顕明の裁判の弁護をおこなった平出修の「平出修研究会」に参加した。

およそこれらの資料収集、調査、聞き取り、研究会参加を通して、高木顕明の行跡、背景としての大逆事件の経緯と性格、顕明の「指斥」処分等の大谷派の動きなどが、ほぼ明らかになった。その一部は当研究所紀要の第14号に掲載した。

また、事件当時大谷派の宗務当局が新宮に調査員を派遣したという事実は知られていなかったが、1910年末、大審院で特別裁判が開かれている頃、大谷派が高木顕明に関する調査を行っていたことが判明した。それは、その際の「復命書」の下書きと思われる資料が1996年7月に発見されたからである。この資料は、顕明研究において不明であったり、不確かであった多くの部分を明らかにしてくれる、顕明研究のみならず大逆事件研究全体における重要資料の一つであると考えられる。それゆえ、研究年限を過ぎてからのことであるが、この資料の発見と、大谷派宗務当局の許可を得て前記の紀要14号に抄録したことをここに付言しておきたい。

今後、前述した顕明に関する研究のそれぞれの側面について、いわば個別的研究を進めていきたいと考えている。

個人研究

正倉院文書より見た古代仏教に関する研究

研究代表者　宮﨑　健司
（日本古代史）

本研究は、奈良時代を対象として、個別写経事業および蔵経目録などの分析を通して政治史的・仏教史的意義を検討し、当該期の仏教界の動向と王権・国家との関わりを明らかにすることを目的とするものであるが、その素材として、研究題目にも掲げたごとく、特に奈良時代の一級史料である正倉院文書を扱おうとするものである。具体的方法には、三つの研究方法、つまり個別写経事業の分析、経録・蔵経目録および勘経史料の分析、寺院・僧尼の動向の分析に主眼をおいている。本年度の研究では、これらの具体的検討も一部行なったが、その前提となる正倉院文書の整理などに関わる基礎作業に力点をおいて行なった。

正倉院文書は、古代の古文書集・印譜の制作を意図した江戸時代の穂井田忠友の整理と、その編集方針を受け継いだ明治の整理によって、永く伝えられていた奈良時代の状態が混乱させられてしまっている。そのため正倉院文書を素材として分析する際、混乱させられた状態を、それ以前の奈良時代の状態に復原することが必要である。現在、一部の機会を除いて正倉院文書を実見するこが不可能な状況にある以上、その作業は正倉院文書（正集・続修・続修別集・続修後集・塵芥・続々修）のマイクロフィルムおよびその紙焼と、『大日本古文書』（編年文書）全25巻の活字とを比較していくことによってしかなしえないといえる。その作業でもっとも煩雑なのは正倉院文書と『大日本古文書』の対照である。そこでその対照に便ならしめるため、データベースによる正倉院文書（種類＋帙数・巻数＋表裏別）と『大日本古文書』（巻数＋頁数）の「正倉院文書対照一覧表」の作成を企画した。『大日本古文書』の巻数と頁数に対応する正倉院文書の種類を一覧表にし、それを順次入力してきており、八割がた終了している。今後、完成に向けて作業を継続していきたいが、データ項目として正倉院文書の紙数および『大日本古文書』の行数といったよりきめ細かな設定も必要と感じられたので、さらに改良も考えていきたいと思う。データベースの完成によって正倉院文書と『大日本古文書』の相互の検索も可能となり、復原作業がよりスムーズになるものと考える。なおデータベースには桐Ver. 5を使用している。

また正倉院文書の仏教学的・仏教史的視点による分析に関わって、当該期の仏教を特徴づける基準として、いかなる仏典が重視されているのかを見極める必要がある。その一つの方法としては、当時経典を選択する際に重要な基準とされたであろう『大唐内典録』『開元釈教録』『大周刊定衆経目録』の入蔵録に含まれるか否かを問題にするのが有効と思われる。しかしながら、著名な経典を除いては、ある経典がどの経録の入蔵録にあるか、ないかを検索するのは、案外煩雑なものといわねばならない。そこで入蔵録の検索に便ならしめるために、データベースによる『大唐内典録』『開元釈教録』『大周刊定衆経目録』の「三目録対照入蔵録一覧表」の作成を企画した。当該期に『開元釈教録』が重視されたと考えられるので、『開元釈教録』の入蔵録を基準とし、順次入力してきており、九割がた終了している。さらなる改良も視野に入れつつ完成に向けて作業を継続していきたい。なおデータベースには桐Ver. 5を使用している。

一方、正倉院文書を整理するなかで、個別写経事業の一つとして、光明子の七七日を契機とした『称讃浄土経』の書写事業の分析を行ない、すでに『大谷学報』第75巻第4号（1996/3/31発行）に「光明子七七日写経をめぐる一、二の問題」と題して公表したところである。ここでは光明子七七日写経の関連史料を整理し、書写の状況をあとづけ、その意義を論じた。特に書写に際して『称讃浄土経』が選択されたことに着目し、その背景には藤原仲麻呂の仏教政策のブレインと目される興福寺僧慈訓の関与がうかがえることを指摘した。また「中将姫願経」として著名な『称讃浄土経』の古写経がその遺巻である可能性も示した。さらに奈良時代では十分に明らかにされていない浄土信仰の具体相を分析する上で重要な材料になるものとも考える。

以上、基礎的作業にその多くを費やし、得た成果は多くはないが、本年度の成果に立脚しながら、残された課題に取り組んでゆきたいと思う。

日時　1996年7月22日
場所　博綜館第4会議室

アメリカにおける日本仏教研究の状況

(米国デュポー大学)　Paul Watt教授

先日、安冨先生に講演を頼まれた時に、あんまり抵抗せずに先生の依頼に応じることにしました。それは決してアメリカの仏教学、宗教学について特別な知識をもっているという自信から応じることにしたのではなく、安冨先生や大谷大学の他の先生、また図書館の方々に色々お世話になってますからお断りすることができないのです。ですから素直に引き受けましたが少し困ってます。また、わがままな理由になりますけれども、私の話がどうであろうとアメリカの仏教学、あるいはもう少し広く考えたら宗教学に関するいくつかの問題を提出できれば、少なくともそういった問題についての皆さんのご意見を聞かせていただけるわけです。その意味で話しをする機会を与えて下さったことに感謝しています。

今日のテーマは「アメリカにおける日本仏教研究の状況」とすることにいたしました。今日は適当な資料を持ってきていません。また大谷で入手できる資料を使ってまとまった講義を用意する時間も今ありませんので、直接そのテーマに挑戦しないで、まず簡単に自分の研究の紹介からはじめ、そしてそれを出発点として、もう少し視野を広げて自分の研究とアメリカの仏教学、あるいは宗教学との関連について考えていきたいと思います。

私が携わってきた研究、また現に行っている研究が特別な意義があるとは思ってませんが、いうまでもなく私はアメリカの宗教学の世界の中で育ってきたもので、私の研究がその分野の近年の歴史—発展といえるかどうか分かりませんが—を反映しているのは明らかです。与えられた課題への間接的なアプローチになりますが今度はそれでお許し下さい。

またかなり速いペースで話を進めていきたいと思いますので、これから取りあげる一つ一つのトピックよりも研究全体の流れの方向、それに注意していただきたいのです。まず今行っている研究とこの研究に至るまでの過程を説明させて下さい。

今年の夏は二つのテーマについて資料を集めています。一つは古代日本の宗教と女性で、もう一つはオウム真理教です。前者の方、つまり古代日本の宗教と女性は、私が20年も前に始めた慈雲尊者（1718－1804）の研究から少し込み入った過程を経て生まれてきた課題です。覚えている方もおられると思いますが2、3年前に大谷で慈雲について話したことがあります。ご存じのように慈雲は江戸中期の僧侶です。彼は江戸仏教の状態に対して批判的な態度をとり、独学で梵語を勉強して、宗派を超えた仏在世－これは慈雲の言葉ですけれども－つまり慈雲が想像した、仏陀がまだ世におられたときの仏教を弘めようとしました。慈雲にとって仏在世の仏教の中心はやはり戒律と禅定でした。私は慈雲についての博士論文をニューヨークのコロンビア大学で書きましたが、そのころの日本仏教に関する論文はどれもよく似てました。大概の場合には論文のトピックとして日本の高僧の一人が扱われ、しかもこれは全集のある高僧、そうでなければ資料集めが大変で、先生が親切に全集が整った人を選んで下さって、そして私たちがその全集を読みながら、その高僧の時代と思想について書いたわけです。

私がコロンビアにいたころ今ハワイ大学で教えているジョージ・タナベ（George Tanabe）氏も、また大学では教えることにならなかったのですがピーター・ハスクル（Peter Haskel）氏、彼は盤珪の翻訳を出しています。おそらくワデル氏が盤珪の本を出版したのと同じ年です。タナベ氏の場合は明恵で、ハスクル氏は禅僧の盤珪をとりあげたのです。

私たちの思想史の方法論に関する理解は浅かったとしか言えません。少なくとも私の場合、慈雲の思想の歴史的位置づけは大ざっぱであり、彼の思想の分析は彼の中年の法語集である『十善法語』とその他いくつかの法語に出てくる主な概念の解説と、それらの概念の関係の解明にすぎませんでした。しかも私たちにとっては明恵、慈雲、あるいは空海、道元、親鸞、そういう人たちが代表するような仏教が日本の仏教だと思っていました。もちろん彼らの仏教も日本の仏教ですがその一面に過ぎないということと、また普通の人の仏教との関係が非常に

薄いことを私たちはあまり意識していませんでした。

論文を終わらない内に私はアメリカの中西部にある大学で日本と中国の宗教と文学を二年間教えてからコロンビア大学に戻ることになりました。しかしその時には私が前に属していた〈東アジア言語と文化科〉ではなく宗教学科に入ることになりました。コロンビア大学の宗教学科には〈東アジア言語と文化科〉にはみられなかった方法論の重要性に関する高度な認識があって、方法論を専門にしている先生もいましたし、また大学院生の必修科目の一つとして方法論の授業がありました。そういう環境にいて方法論に関する書物を読んでいる内に知識社会学に惹かれました。私が前に大谷で話したときにこの分野に触れたことがありますが、知識社会学の立場を簡単に説明しますと次のようになります。

私たち人間が知識として認めるものは社会的に構成され私たちの住む社会に何らかの機能を果たしているから知るに値するとするものです。宗教の知識も他の知識と同じように社会的に作られ社会の中で何らかの機能を果たしています。宗教の機能、あるいは役割は何かといいますと、絶えず脅かされている私たちが何よりも必要としている秩序に聖なる性格を与えることです。言い換えれば、宗教は私たちの無常の世界を聖なる普遍的コスモスに位置づけることによって私たちを混沌、これは道教の言葉ですがカオス、混乱から守ろうとします。知識社会学を基盤に持っている宗教学が必ずしも宗教者、つまり一つの宗教の一つの解釈を普遍の真理として信じている人に歓迎されないのは容易に分かることだと思います。それは信者が頼りにしている普遍の真理を宗教学者は社会的に構成されているもの、社会的に工夫されているものとして受けとめているからです。

しかし宗教を学ぶものにとっては知識社会学は示唆に富んだ見方ではないでしょうか。知識社会学の立場から宗教を見る場合には思想や教義を無視はしません。しかし思想や教義よりもその思想と周りの社会とのつながりが研究の焦点になります。

一つの宗教が描く世界観がどのように周囲の社会の政治的権力、あるいは経済構造、あるいは男女関係と関わるのか、ただ現状を正当化するのか、それとも現状に批判が可能なのか、どの程度まで可能なのか、こういう問いに答えるのが宗教学の、あるいは宗教学者の責任となってくるわけです。そして日本を例にとってみれば、言うまでもなく先ほどあげた高僧の宗教をこの立場から研究できますし、また同じように江戸時代の村の宗教、20世紀の新興宗教も研究できます。

初めて意識的にこの方法を適用しようとして書いた小論文は「慈雲尊者の性別観」、特に女性観についてでした。コロンビア大学のRuch先生から彼女が編集することになっていた「Women and Buddhism in Premodern Japan」(「前近代日本における仏教と女性」)に投稿しないかと誘いをいただいて書いたものです。

慈雲が興した正法律ーまたは正法律運動といいますがーには尼僧がかなり参加していましたし、また彼の法語のうちには尼僧と在家の女性のあるべき様にふれるものがいくつかあります。彼はもちろん女性の解脱を認めていて、いわゆる五障思想を批判しましたが、その一方で仏陀在世の規則であった八敬法、尼僧が守らなければならない八つの決まりを躊躇せずに強調しました。やはり初期仏教に忠実に八敬法を復帰させようとしたのです。この論文を1990年か91年頃、編集者に出しましたけれどもまだ出てません。

1993年頃、また日本の女性と宗教について書く機会がありました。アメリカのAAR(アメリカ宗教学会、The American Academy of Religions)の1993年の全国集会で「女性と禁欲主義(Women and Ascetlcism)」という比較宗教のパネルに入ることになり、そのために「日本宗教史における女性と禁欲主義」という小論文を書いたのです。比較宗教のパネルでしたから、聞き慣れない言葉だと思いますけど、キリスト教史に度々見られる女性の英雄的禁欲主義(Heroic Ascetlcism)が日本の宗教界の中で見られるかという問題を取りあげました、英雄的禁欲主義という言葉は古代キリスト教の大家であるピーター・ブラウン(Peter Brown)氏が、また中世期のキリスト教における女性と食べ物について書いているキャロライン・バイナン(Caroline Bynum)氏が使う言葉で極端な禁欲主義を指すわけです。彼らによるとこういう極端な禁欲主義を実行しようとするものは何年も、また何十年も断食に近い生活を送りながら、家や修道院にこもってお祈りをしたり、あるいは病人や乞食の世話をし、村や町の人に聖者として尊敬されます。そういう人たちを英雄的禁欲主義者といってるわけです。

私が調べた限りでは日本の宗教史の中で女性の英雄的禁欲主義者はほとんどいません。確かに『法華玄義』ーこれは11世紀あたりのものでしょうかーに山にこもって断食をしながら『法華経』をとなえる女性の話が一つあったり、また新興宗教を創始した女性の中で教祖様というんでしょうか、そういう女性の中で英雄的禁欲主義者に近い例もあることはあります。しかしそのような例がほとんどないということは女性にとって英雄的禁欲主義

を通して宗教が与えうる権威を手に入れる道がほとんど閉ざされているという事を示します。宗教的権威を獲得できる方法は他にあるでしょうが、英雄的禁欲主義で獲得することは非常に少ないようです。この結論にどれほどの重みがおかれるべきかはまだ分かりませんが、少なくとも日本の宗教と男女関係について考える場合、念頭に入れておくべき事実の一つだと思います。

このように私は慈雲の仏教思想から日本の仏教の研究に入り、そして慈雲の女性観をとりあげて、最近では慈雲を離れて日本の宗教史における女性と禁欲主義について書いたりしています。今年の夏、女性と日本の宗教についての研究を延長して古代日本の宗教と女性に関する資料を集めだしてます。またこれから何年間かにわたって日本の宗教と女性の歴史をたどっていきたいと思っています。今のところ『古事記』、『日本書紀』と、また上田正昭先生のような古代史、古代宗教の専門家の本や論文を読んでいるところです。ご存じのように日本の古代社会の女性の地位はかなり高かったようです。宗教的権威や政治的権威を握った女性も少なくありませんでした。しかし7、8世紀あたりから女性の地位は次第に衰えていきます。やはり私の一番の関心事といいましょうか、それはその原因です。律令社会の発展が関係しているようですが、6世紀に入ってきた仏教の五障思想が与えた影響も大きかったようです。いまの時点で中間報告もできませんがそれはこの次にしましょう。

話の冒頭にオウム真理教についても調べていると言いましたが、オウムに移る前に、今まで簡単に紹介した自分の研究と現在アメリカで行われている日本仏教の関連について一言加えたいと思います。

高僧の思想から段々と女性の宗教史に研究の焦点を変えてきたと言ったのですが、私と同じように歴史的、社会学的な観点から日本の仏教を研究している人は多いのです。女性と宗教、民間宗教、新興宗教、仏教儀式、こういった分野の研究がいま盛んに行われています。アリゾナ大学のエリザベス・ハリソン（Elizabeth Harrison）氏は水子供養の研究、カリフォルニア大学のアレン・グラパード（Allan Grappard）氏は春日神社の混淆宗教－これも仏教、日本の仏教に入る－の研究、大谷大学にときどきいらっしゃるオームズ（Ooms）氏の奥さんであるエリザベス・オームズ（Elizabeth Ooms）氏は大本教、ハーバード大学のハーデッカー（Hardacre）氏が霊友会、黒住教、バージニア州にあるワシントン&リー大学のウィンストン・デービス（Winston Davis）氏は真光を研究されています。他にも例はあげられるんですがそういう研究が非常に盛んなわけです。真宗についてはジェームス・ドビンス（James Dobbins）氏も鎌倉時代の真宗の女性について研究しているようです。思想より思想の条件の研究が、あるいは社会の知識層、支配階級に属する人の宗教より女性や、民衆の宗教に関する研究が主流になってきているのではないかと思います。そしてこのような雰囲気の中で宗教学と伝統的な神学と哲学の間の隔たりは大きくなる一方です。

さて最後にオウム真理教に触れさせて下さい。私がオウムに興味を持ったのは東京の地下鉄サリン事件がおこってからです。今住んでいるインディアナ州には日本の宗教の専門家が私以外にいません。事件が起こった後、学生や他の教授から質問を受けたり、またオウムについて話したくて電話をしてくる人もいました。新聞からも電話がかかってきたわけです。彼らの質問に答えるために麻原の本やその他の資料を集めだして現在に至っています。オウム真理教は宗教的現象としてはそれほど珍しくありません。他の宗教、またいわゆる新新宗教と比べた場合に際だって目立つのはオウム教団の組織が国家の組織をまねているという事と、オウムのハルマゲドン観にともなう極端な暴力です。新宗教に見るカリスマ的指導者と混淆思想（syncretism）がオウムにも見られます。また島薗進氏が指摘したように特に新新宗教にみられるように若者の活動が目立つこと、強引な勧誘や巨額の献金やフロント組織の活用、また派手な広告宣伝やメディアの活用、死や死後の世界を見つめること、神秘的な超常現象への関心の高さ、終末観や来るべき危機の強調など、こういった特徴がオウムにも見られます。そのうえ日本の新宗教だけではなくオウムがアメリカの新宗教、特にギアナで集団自殺を遂げたジム・ジョーンズ（Jim Jones）の人民寺院（People's Temple）、コレス（Koresh）が指導したブランチ・デビディアンス（Branch Davidians）がよく似ています。

これらの宗教が共通に持つ特徴は3つあると思います。1）それぞれの信者は周囲の社会から隔離されて生活していたこと、2）カリスマ的指導者への服従が強調されたこと、3）終末観が強調されたことです。特にこの3つの組み合わせは危険なようです。オウムについては今日はこれ以上の結論は出そうとはしません。東京地下鉄サリン事件や、人民寺院の100人に近い集団自殺や、ブランチ・デビディァンスのテキサス州のウェコ（Waco）の事件、こういう事件の後に私たちは再発防止について論じあうのです。いま日本ではマスコミと警察が厳しい批判をうけていて、それは然るべき事でしょう。

しかし長い目でこの問題について考える場合、私たち宗教教育に携わっている人たちにも責任があるはずです。つまり私たちが高校や大学の授業で宗教の批判的見方とでもいいましょうか、そういう宗教の見方を学生に教えなければ他に教える人はいないでしょう。アメリカの大学にはこういう宗教学的な宗教の扱い方、見方が徐々に広がっているようです。日本の大学ではいかがでしょうか。

真宗総合研究所彙報　1996.4-1997.3

■研究所委員会

４月11日（木）17：40～　博綜館５階第３会議室
議　題　1.　1996年度「指定研究」について
　　2.　その他
11月12日（火）17：50～　博綜館５階第４会議室
議　題　1.　1997年度「一般研究」の選考について
　　2.　研究紀要、研究所報の編集について
　　3.　その他
３月27日（木）13：00～　博綜館５階第３会議室
議　題　1.　1997年度客員研究員について
　　2.　1997年度「指定研究」について
　　3.　その他

■「指定研究」チーフ連絡会

11月20日（水）教授会・監督者説明会終了後
　　博綜館５階第３会議室
議　題　1.　来年度の研究計画・予算について
　　2.　その他

■データベース懇談会

２月14日（金）14：30～　国際仏教研究室
内　容　1.　ハード面の共有について
　　2.　各研究班の現状と情報交換
　　3.　その他
３月３日（月）17：00～　博綜館５階第５会議室
内　容　漢字入力にあたっての諸問題

■「指定研究」研究会／会議

国際仏教研究

５月23日（木）17：00～　博綜館５階第４会議室
テーマ　The Unique Potential of Shin Buddism in Western Society
講　師　Alfred Bloom氏（ハワイ大学名誉教授）
６月27日（木）18：00～　博綜館５階第４会議室
テーマ　近代真宗教学者の群像―西洋の宗教思想の観点から―
講　師　Mark Blum氏（フロリダアトランティック大学教授）
６月28日（金）16：00～　博綜館５階第４会議室
テーマ　欧米における真宗の未来像
講　師　羽田　信生氏（沼田仏教翻訳センター）
７月22日（月）16：00～　博綜館５階第４会議室
テーマ　アメリカにおける日本仏教研究の状況
講　師　Paul Watt氏（米国デュポー大学教授）
11月15日（金）18：00～　博綜館５階第５会議室
テーマ　Shinshu Thought as a Challenge to Traditional Western Patterns
（伝統的な西洋の思考様式への挑戦としての真宗の考え方）
講　師　Volker Zotz氏（元ウィーン大学講師）
12月６日（金）18：00～　博綜館５階第４会議室
テーマ　北米開教の現状と課題
講　師　広住　剛師（開教使・ニューポートビーチ東本願寺）
２月14日（金）17：00～　博綜館５階第５会議室
テーマ　国際的な視野からみた近代真宗学、または教学者の意義
講　師　Jan Van Braght氏(南山大学名誉教授)

大蔵経学術用語研究

11月22日（金）18：30～　大蔵経学術用語研究室
テーマ・OCR入力の実際について
　　・入力作業における諸問題の検討
　　・その他

■　一般研究　研究会／開放セミナー

［共同研究神戸研究班］
近代における仏教研究の方法論―近代の仏教研究における清沢満之の地位と基礎資料の検討―
10月22日（火）17：00～　博綜館５階第５会議室
テーマ　清沢満之全集編纂に向けて
講　師　久木　幸男氏（横浜国立大学名誉教授）
[共同研究吉元研究班]
大谷大学図書館所蔵パーリ語貝葉写本の文献的研究
８月５日（月）10：30～12：00　吉元先生研究室
テーマ　パーリ仏教に関するおはなし
講　師　スリランカ学僧マヒンダ博士（京大研究生）
９月13日（金）16：15～20：00
テーマ　パーリ仏典にみられる古代インド文化の様相
講　師　杉本　卓洲氏（金沢大学教授）
［共同研究荒井班］
書簡体の研究
12月13日(金）13:00～17:00 博綜館２階第４会議室分室１
テーマ　ドイツにおける書簡体小説について
講　師　渡邊　洋子氏（大阪学院大学）
１月18日(土）13:00～17:00 博綜館２階第４会議室分室１
テーマ　近世文人の書簡について
講　師　水田　紀久氏［本学非常勤講師］
［個人研究番場班］
ジャック・ラカンにおける“愛”と“欲望”の理論の研究
＊一般公開セミナー
12月24日(火）15:00～17:00　博綜館５階第２会議室
テーマ　La phychanalyse en Franca aujourd' hui
　　―LA prace de Jacques Lacan dans la culuture francaise―
　　フランスにおける精神分析の現状
　　―フランス文化におけるジャック・ラカンの占める位置―
講　師　J.―D.ナシオ博士（精神科医・精神分析家）

■学会参加／調査派遣

大学史編纂研究

＊西日本大学史担当者会第13回研究会・1996年度総会

6月6日（木）14：00～

会　場：大阪市立公文書館、大阪市編纂所

参加者：安藤　文雄（真宗総合研究所主事）

　　岩城　舜一（大谷大学総務部次長）

＊第1回全国大学史資料協議会東日本部会研究部会

7月17日（水）14：00～15：30

会　場：東洋大学

参加者：三明　智彰（研究員）

＊全国大学史資料協議会設立記念総会および1996年度全国研究部会

10月8日(火)～9日(水)

会　場：広島大学

参加者：平原　晃宗・三浦　統（研究補助員）

＊全国大学史資料協議会西日本部会

12月13日（金）14：00～17：00

会　場：大阪音楽大学

参加者：御手洗　隆明（研究補助員）

国際仏教研究

＊1996年度国際真宗学会ヨーロッパ地区大会

8月5日～7日の3日間、ドイツのデュッセルドルフ恵光寺（Eko-Haus）において開催され、友田孝興研究員と樋口章信研究員が参加した。

＊Institute of Buddhist Studies Center for Contemporary Shin Buddhist Studies Symposium

9月13日～15日の3日間、カリフォルニアで開催された上記シンポジウムに加来雄之研究員が参加した。

＊1996AAR（The American Academy of Religions）

11月23日～26日まで、アメリカ・ルイジアナ州ニューオリンズにおいてアメリカ宗教学会が開催され、安冨信哉研究員が参加した。

西蔵文献研究

＊調査派遣

5月28日～29日、「チベット語文献OCR入力の調査」のため、兵藤一夫研究員と加藤秀樹研究補助員が東北工業大学に派遣された。

＊第44回日本西蔵学会大会

10月26日（土）東北大学において開催され、研究補助員の加藤秀樹と三宅伸一郎が参加した。

■人事

1996年4月1日付を以て、研究所主事が兵藤一夫助教授から安藤文雄助教授に交替、又嘱託事務員として三好裕子が採用された。

同年10月1日付を以て、研究所所長が片岡了教授から友田孝興教授に交替した。

研　究　所　報　第35号

1997年12月15日　発行

編集発行　大谷大学真宗総合研究所

〒602-0802　京都市上京区寺町通今出川上ル二丁目鶴山町8番地

Tel. 075-212-5500　Fax. 075-212-5501